

段創作人  
又手

分行八

4字F4

姉を訪問す

葛西善蔵

十五倍

和字三

その時分私は得體の知れないう暗い不安に悩  
 まされてゐた。生身の自己破壊、生活の危機  
 一さう云つた焦燥と絶望に駆り立てられ  
 私はさつとも落付いて居られないう不安な氣  
 持かつた。不慮なまづたく思ひもかけな  
 りやな事件でも突發して根柢的な破滅に陥  
 るか、それとも近いうちに死ぬるのではない  
 かと云つたやうな不安に襲はれ勝であつた。  
 それほ私の心も身体も弱つてゐた。誰か明  
 日の運命を知ることか出来るか——さう思  
 へ、私は淋しかつた。  
 その頃私は鎌倉の茶を飲まへて、一ヶ月程  
 鶴見のH園に逗留してゐた。そして十月の上  
 旬にたつたが、H園にのたりの額の借財を返し  
 乙置いて、またも道走同様の不始末で、もう  
 麦稈帽の氣に、ある時分たつたが、さうして夏

の仕度のみ、ごけ園を出て、北海道への旅を  
志したのであった。

鎌倉のお寺の老和尚さんのふとした身の上  
話、その時分かなり強く印象されておたの  
び、聽見を養って来る電車の中でもふとその  
ことが思い出されて、私は暗い気持ちになつた  
。老和尚さんは美濃の産物で、七つの時に同  
じ年の友達と二人で江戸へつれられ来るこ  
ろ、友達は麻布のある寺へ、和尚さんは小田原  
在のある寺で二十九の集まで暮し、それ以外

の五十年を建長寺へ勤めて来たのであつた。  
それでは、そのお友達の声は今どこにゐます  
か、やはり達者であるのでしょうかと、私達  
は二人で酒を飲み合つた時に、耳の遠い老和  
尚さんに、そんな話が出たので、大きな聲し  
て斯う記したのであつた。すると、  
それがなあ、小頃な時にあつたことをし  
たんだといふかな、大きくなつてからあつた  
ことをしたもんか、日本橋で曝し者にな  
つたいよいよと、老和尚さんも沈んだ調

2.

子になつて云つた。

いんをわりのことをしたんですか？ とは

さすがに私に証を傳なかつた。利達の筒素を

酒罎に、一十の向なから淋しい暗い影が投げ

られた。

離れ行くは園の丘陵、仄の架檜、總持寺

の大屋根、鈍く光る線路——私は後ろの車掌

臺の柱につかま<sup>つて</sup>、さう云つた時のを

出しい思ひに眺め遣りながら、老和尙さんと

のその晩のことを思ひ出してゐた。遠く都會

を離れて北海道の雪の中で短い詩をも作つて

一冬を過した——さう云つた陰に家もほし

かつたし、また十七八年も會はない外に會つ

て此世の暇乞ひ——さう云つた甘うな氣持を

かぎり強く動いてゐたのであつた。

郷里の妻の實家で、一年ぶりで妻子とも會

ひ、着て来たを單衣を袷に直させたりして、青

森や八時の連絡船に乗るべく、朝早く妻の

村から汽車に乗り来た。車窓から田圃越しに来

の家が眺められたか、今更のやうに、この近  
年次がくはに妻の家に起つた不幸なことがあ  
へられた。前の集に妻の妹の年頃の娘が二人  
も、流寒や急性の腹膜炎で死んでゐる。弟の赤  
んぼうも死んでゐる。嫂は長く患つてゐるし、  
妻の父自身も老衰といふく健康を損じて要領に  
親んでゐるた。そして此頃は毎朝のなりの時  
了と佛前に籠つて観音堂を讀んでゐる。私が  
出かける時も丁度その時であつたので、私は  
別れの挨拶をしに来なかつた。私は歸りば  
靑森から本線に来るので妻の家へは立寄らな  
いつもりであつた。□□といふこへ行つても不幸はか  
しだ、いふと、私は遠退いて行く妻の家を車  
窓より眺め送りながら、やはり折つした感慨  
めいた気持ちになつた。

靑森午前八時出帆、Ⅰ丸三等客。——十月  
の半ばごろのとき、もう此邊では秋の末と云つ  
て、いふのだから、この日は好く晴れて、海も穏  
かであつた。津軽海峡を越える時の一時は位  
るの間のほかは、私は大抵甲板に出してゐた。

私かこの海峡を越えよのは、これで三度目であつた。最初私利の三つり集、私の家の倒産時代に一家を舉げて佐々國の京都に避難した。かその時分の記憶はほとんどない。二度目は十七の時で、その時は友達と二人だつたが、冬ど海の荒い時節だつたので、室蘭までたつたかかありせんたものである。哀しい思い出である。私達は一枚の毛布にくるまりながら船室の丸窓か山のかしに大きくうねつてゐる蒼波の上に雪片の散るのを、恐怖と驚

異の眼で眺めてゐた——その時分と同じ蒼い波の大きさをうねりを、私は靴を枕にかなり揺れを感じながら、私を引入れかするやうな氣持で眺めてゐた。自然はいつだつて、私の死なんか拒みはしないのだ、この通り深く、大きく、無関心を魅力で誘ひてゐる、自分はいつだつて、自分の意志一つで自由に断つた自由の中、死に込んひき死ぬことか出来るのか——さう云うた氣持が、此頃の焦燥と絶望、この病的な氣分に、一服の緩和劑

二二 夢野秋山

ごあつた。 ~~そ~~ また、海峡と違ると、私は甲

帆に出た。

いゝ和ぎでしたわ

二れ位なと船も乗ですか

今日なんか倉程楽し方なんでせうね

さうですと。 なか〜こんなもんぢやあ

りませんよ。 私は十日はかし前にも一度乗っ

たの、とい目には會いましたよ。 此中はず

うつと荒々ておんでしたわ。 今日なんか

珍らしい方です

あの向うの煙筒は、あれはもう返館ですか

いや、あれはセメント會社か何りの煙筒で

せう。 返館はあの岬を右に曲ったところす

もうおき見えます

櫓干に倦れた客の間に、折した會話か交

はされたりした。 その邊から帆を揚がた漢船

かちかほし見え出したり、波をくわつてみる

島の群が見えたりした。 三角型に聳立した釣

ヶ岳の頂ま近くは雲が見えた。

一時半に船が桟橋に横付けになり、そこ  
 らすぐまた連絡の船が旭川行き列車が出る  
 のであった。この線に乗るのは私は始めてい  
 った。札幌附近のやうな廣瀬を眺めはな  
 いか、やはり北海道らしい粗野な沿線の風景は  
 多少の興味をこいた。大沼公園の楓樹や、  
 楠、白樺などの自然のまじりの紅葉は、さ  
 すかに目も醒めるばかり美しかった。蝦夷官  
 士の端麗な姿が車窓から眺められた。私と腰  
 掛に向り合つて、  
 始め

え、色白の丸顔の洋服の男——私は最初の  
 少船員とは見てゐたが、彼は二十で、戦後の  
 歐洲航路の運送船に乗りに込んで、今度  
 満二年ぶりで神戸に歸り、そんが、おうつと  
 直して小樽まで来たのであった。小樽に  
 母が一人ゐると云つた。函館の商船学校を中  
 途で廢めて、さうした船に乗つたのであつた  
 。彼は英人の傲慢や独逸の窮状について私に  
 語つた。  
 今度はまだ、どつちの方へ出かけますか

[7]

と、私は記した。

いや、実は船乗りは廢めるつもりです。廢

める手續きをして来ました。私達のやうな弱

い人間では身体こゝろをこゝろニおして了います。

ね。永くわつてる商賣はありませぬね。そ

れに私なんか母一人を申しです。

こに随分心配もします。

廢めます。叔父が旭川の商賣をやつてますか

い、その方を手傳わつたりしてゐます。

はもう之派に常操の出来た一人前の男のやう

な態度こゝろをこゝろにこゝろ後した。

あなたの方の商賣はこゝろと、彼は記した

す、あ、実は、私はい、説見たいなものを賣い

たりする方なんですか。

さうでしたか。

私はまだこの邊の何か商人か。

女んごでしたか、商人としてお話し變ぢとも思

ひましたか、何しろこの邊の商人さんとい

るんを人間が、ありあすやね、へんな馬鹿な

まかしたりして、やうな商人が多いとしたか  
い、い、彼は斬る、私への少しの皮肉をも金  
まろし正直な調子で云つた。

この邊の商人——恐らく彼は、この邊の山  
師——さう云ひたかつたのではないかと思ふ  
と、私は軽い微笑の感じをわいた。殊に、私か  
事の父が、借りて来た古銅の鼠色の外、套  
が、有力に彼にさうした印象を興へ、夏た小  
し、いつた。彼は私に籠の葡萄や大泥を物の對  
の雀焼や驛で賣つてゐるまんぢうなど絶えずす

くめた。

これは独逸で買つて来たのですが、日本の  
金にすると四四位の身で、すか、と云つて  
片がラスの裏に十字の七寶のある小型な銀  
時計を出して見せて、これは母への土産で  
す、と云つた。

森林驛に着いたのは四時頃だったが、荒涼と  
したあたり山野にも海にも暗鬱な秋の  
日の夕方が押寄せしめた。海を越えて噴火湾  
の一帶が、ぬかりなり、同近かに眺められる。あ、

か室蘭の製鋼所の煙筒？——私ばかりかの青  
 年に向いたやうに思つた。森と室蘭の向は  
 毎日汽船が往復してゐる。可は、あ、森と云  
 ふところは何処なところか、い、いと、私は車  
 窓から如何にも漢師町らしい感じの、停車場  
 附近の粗末をこみくした家や、小さな桟橋  
 など、~~おぼろ~~眺めて、特別に注意を動かされた。  
 対岸の室蘭の町にも哀愁の思ひ出をこぼし、  
 た。室蘭の町の劇場裏の小さな下宿屋で、私  
 は湮浪の果の幾ヶ月かを國の知人が驛に勤め

て居る人の原意が、ここの三畳の室にこゝろ  
 してゐた時分だつたが、そこで一ヶ知合つた  
 二十四五の壮士俳優で、どうして一行にはい  
 りたのか、一人で下宿に尻残つてゐたが、あ  
 る日私が森へ渡る旅費を借りて、そつと下  
 宿を出て行つた。可森で茶合ふことにまつて  
 るのだから、向うへ着くとすぐ送る白断う  
 まつて僅かばかりの金を借りて行つたのだが  
 無論たよりは来たかつた。彼は一座の作者  
 の方がと云つてゐた。私は一晚彼等の芝居を

見に行つたが、彼の役は簡単な玄圃番のやうな役であつたせゝも、うか、粉装と云ふ聲と云ふ態度と云ふ、ほんとんど平生のまゝの無難作な様子だつたので、その時分の私には一竹奇買<sup>に</sup>感じ<sup>に</sup>ふれた。色の濃黒い一廿いゝ男だとは思つたが、どこか弛緩したやうなところがあつて、役者なしてまゝものはずべて斯んなやうなものぢなうか、それともずつと三十を越えた人間ではないうか、うか、私はいっしょにお浴に行つたりして、

考へさうな方であつた。私はその翌年東京へ出て、公園の常盤を彼の寺の一座だつた女形の名を見出したが、彼の名は見えないやうかつた。——私は、森と云ふ土地の満更縁故のない土地のやうには思はずない氣がして、汽車が出てから、そこの粗末な櫓檣や灰色の海やに心をひかれた。どこかに劇場らしいものが見えやしないかと、首をさしのべて振り返つて見たりした。

小澤駅に着いたのが九時だつた。私はいゝ

詠相手たつたかの青糸と、別れの言葉を交は

た。左様なら……

お大事に……

私は靴と、青森の駅の賣店を買つた飯の鉢

やようかんをどの包みも、両手にさげて改札

昆布口を出て行くと、改札口のちぎの柵に

もたれて人を迎ひにひも来てゐる風が三十秒

した筒袖半纏の女が、後ろかよ私を追りける

わうにして来た

即は今夜お泊りにするんでせうと

さうなら……と、私は女の様子に氣をまつけ

えんちがわしかうちへ泊つておくんをさい

すぐその角のうちかさうですよ。ほかには

旦那方の泊れやうなうちはこの町にはない

でかすよと、女客引は遠慮なくかしないで

私の手から荷物を引たくるやうに取つて

成程、かの女は宿屋の提灯を持つて来た

二十 神楽次出陣

大

先き立って、すぐこの角のうすへ集  
 した。カラス戸の中が丸いテーブルに椅子を並  
 べた待合所になつてゐて、一階と思つた下  
 更には地下室のやうに梯子があつたりして、  
 んな建方かしてあるやうだが、通された二階  
 の六畳は、そんなにもわるい室ではなかつた  
 五六人の泊り客があるやうだが、もういつ  
 ころなつてゐた。  
 汽車で辨當は済まして来たんだが、酒を飲

みたいが、仕度が出来るかある。私は襦袢を  
 重ねて、いつさり火を持つて来た爐に胡座を  
 掻きながら、かなり寒さを感じてゐたので、  
 断る急ぎ立てるやうに訊いた。  
 出来ますと云。まだ早いんですよ。おしは  
 旦那、これはまた、この次ぎの十一時半の夜  
 行にも出るんですよ。  
 粗い縮水髪を無難作に結えた、赭黒い鬘丸  
 を骨張つた顔の、鼻が小さく胡座を掻いた  
 洒々した服付の醜い女であるが、もう一人

13、

出て来た若い女と疑へて、年がけに如才ない  
 ところがあると思つた。風呂がないので、洗  
 面所で顔をど洗つたりしてゐるうちに、女は  
 手料理の生イカ、ホヤ、くらめの刺身  
 時端れの泥鰌の蒲焼など、云つたやうなも  
 のを膳に並べ持つて来た。  
 且那おしなはどちへ立ちなされるしかね  
 M村のIと云ふところへ行くのだが、やは  
 リMの停車場で下りたらしいんだらうね。何  
 どもIと云ふところの停車場がかなりある

と聞いて来たんだが、俤なんかあるところか  
 知ら。兎に尚明日は一番——七時四十分だ  
 つたね、えれで立つらもりだが、向に合ふ  
 やうに仕度して呉れ  
 えれはもう向に合せて仕度さしますとん。  
 あしもね、この邊は始めがいいよく知りませ  
 かね、何でMと云ふところは随分廣いとし  
 るださうで、塙所によつては一つ手前のHで  
 下りた方がいいちんでこの間もお客さん  
 向きましたのかね、うすの且那はこの邊のこ

ては詳しいか。明日の朝よく訊いてあげま  
す。い、且那もやはり何か二高法かね？  
いや、一々親戚のものか居るし、遊ばに束

たんさ  
さうかね。且那はお國はいつふかね？  
俺は津軽だよ。

さうかね。且那は津軽の人かね。わしはつ  
この二月は、し前に樺太り、歸ったばかし

知かね、やはり津軽の人で木村さんと云ふ人  
かつたかね、あつすでは随分世話になつたけ

か、い、且那かつた。い、さうかね、且那  
もやつほし津軽の人かねと、かの女は幾つ

でもかく、盆を乾しては、無遠慮な調子で  
訛した。

その人か且那かつたと言ふ話か、ね？  
そんな且那と云ふほどのものうてはないか

そりやつた、あ力にもなつて世へいましてさ  
毎年出かけたのかね？

いや、昨年か、たか、また来春も出かけた  
ますさ。

こんなとこで、斯んなにしてゐたつ

十一、二十 津軽国山田

源氏物語

夕

て、まるでカラ奉公ですか小ね、  
且那が顔ま洗ひに行きなすつゝ、時頼洗ひ場に  
男の子がぬたでせうか、  
見をさすな

幾つ位かの、十五六の子か、  
さうでございますよ、あれが、且那あしが子さ。

あの子と二人で断りして冬中カラ奉公して  
でがすよ。寝喰ひよかましと云ふ話であらう

ほんとは、亭主が、いのかね、  
且那、

且那、スリやとつくの昔の

話ですと、女は如何にも屈托のなすう

ま、また子供もあれに月つてみるのたか

ふ打集つてくわつて、亭主さんが真平か

まの味のことを、誇りしげな調子で云つた

か、赤染色に酔の出て来た顔や眼付きに、男

飲しゲの色が、燃え立つて来るやうな

気がたれ、私はこの様だ女に一種の壓迫を

感じないで、少しも有かつた。

女が十一時半の夜行に出る前に、私は思ひ

切つて、実業源もまずい酒だつたので、生酔  
 で我慢して、明日の早起きを案にしなかり、床  
 に這入つた。

小澤と岩内の九哩餘りの間は輕便鐵道であ  
 った。●狭い車室の中のぬい小さな鑄鐵のス  
 トーグ<sup>は</sup>に石炭が燃えてゐた。移住長少しい一  
 行の様子を、ストーグを囲んだ土方少しい一  
 群が仲寫の●怪儂人の噂々などしてゐるのを  
 眺めながら、●私は柳たすくの會見を頭に描い  
 てる左。十  
 私<sup>は</sup>陽の方の標樹で七八年一

私たすは餘りに會はなさ過ぎたやうな氣が  
 した。●柳の良人と●私たすの會つてゐな  
 かつた。●中の柳なんたか、●私はこの柳の氣質  
 やかの女たすの生活がりに●好感を持つてゐた  
 。●それかたつた海一重を障つてゐると云ふた  
 けで、●私たすは十七八集も會はずに来たのだ  
 。●それほどお互いの生活に餘裕がなかつたと  
 云ふ記ひがある。●最初柳屋會社のやうなもので  
 手を焼いて無駄産となり、●その後やはりM村  
 の●と云ふ方で刻畫して少し恢復しかつたと

男めと自分から火事を出したとか、やせり姉  
の方にもいゝ話が出来たのだ。今度、Iへ  
移ったのは四五年前だと思つた。

小澤と發つてだんくM駅附近の廣瀬を  
眺め——高い望の見える山など登えたりして  
ゐるので高原の感じだが、それが悉く水田で  
朝日に黄色く輝いてゐる廣々した光景は、  
かゝり爽快な感じであつた。その向にホツリ  
くと家が見えたり、萩菜のかなり、寺の建  
物が見えたりして、私の地味やうなコセ

した感じになつた。しかし新鮮ではあるが  
寧ろ新鮮過ぎる。蒸つぽく冷感を感ぜ——  
さう可つた感じに對して、逆も自分のやうな  
懶弱な人間の神経が堪えられなうもないと云  
ふことまで、私はかなりはつきりと感ぜさせさ  
れた。鶴見道走以来の私の陰れ家の空想は、  
随くも破れられたが、しかし先望する程度の  
ものではないかつた。私はやはり飽きで、單  
純にたい、柳たすと會ひ始めに来た——さう  
單純に自分の心持を片附けて了つた。方か

此際双方の爲めに、印象を分ち合ふこと  
 にならなかつた。私は賢くも思ひついたので  
 あつた。久しぶりの姉、初めて會ふ義兄や甥や姪  
~~義妹~~——私はわろい印象を残して来てはな  
 ないのだ。恐らく私は二度と此訪ねて来る  
 ことは出来ないのだ。肉親と云つても、この  
 世では、實に停ない、淋しい関係のものでは  
 ないか。それが人生なのだ。……  
 停車場前、私はIへの大體の方角を訊い  
 た。M村と云つても、ほんど二里四方の廣

さなかつた。私は停車場前の山間の路を真直ぐ  
 に、両側にホツ／＼と石を置いて往來り、引  
 込し、~~た~~田や畑の中、百姓が夏草を刈り、跳め  
 るか、~~た~~両手に靴と包をさげて、朝の目を  
 浴び、新鮮な空気が吸ひながら急ぎ  
 足で歩いた。行つた。学校通ひの小供の五六  
 人、~~た~~たつた。追付いた。停車場から五六  
 町離れた、その学校の前を左りに曲るや、  
 は私は教へられぬた。  
 Iのテ、佐々木と云ふ小供が、学校へ

来ておませんか？と、私<sup>は</sup>中での年長者少  
 しい小供に斯う訊いて見た。彼等は私に訊か  
 れると、丁寧にお辞儀をした。  
 佐々木と云ふ小兄弟で二人で来てゐる  
 と、その小供の答へた。  
 何年位の子？  
 高等二年に尋常六年だ。  
 さう、いゝではせんか。今日も来てゐるか知  
 らない、あなたね、氣の毒だがね、私<sup>は</sup>門の  
 ところで待つてゐるから、その佐々木と云ふ  
 小供を呼んで来ておませんか？と、私<sup>は</sup>先  
 美和の母たちが来た時にやはり学校に寄つて  
~~彼~~ 錫の子に案内させたと云ふ話を聞いておた  
 ので、学校の前まで来た時に、斯う云つてゐ  
 の子に頼んだ。小供はしばらくして出て来  
 たが、今日は二人と云ふ見えなへと云つた。  
 学校の附近には一軒した店など並んでゐ  
 た。役場や駐在所などもあった。さうした道  
 りが半町ばかりも歩いて、そんな小供が坂に  
 下りたところには橋があり、橋の傍に水

二ノ下 橋を渡り出た

車小屋があり、また坂を登つて右に用水濠に  
沿つて、田~~や~~豆畑などの間を、ホリ~~ノ~~畑~~ノ~~  
てゐる稲刈の人々、稲束を満載した荷馬車の  
女馬子、畑で大豆を抜いてる人々、稲架に稲  
を乾してゐる老農夫と云つた人々、路を記き  
だん~~ノ~~山の谷間の方へと、荷物を背  
にしな~~カ~~、~~ノ~~袋~~ノ~~つかの橋を渡つたりして歩く  
いて行つた。空が綺麗に晴れて、歩む~~ハ~~こゝ  
の汗は~~ハ~~おほ~~ハ~~どの暑さだつた。路傍の草や灌木  
の間の石に腰を下ろして、私は~~ハ~~紅葉した

鳥を休めなが~~カ~~うゆつくりと煙草を吹かした  
りした。しんとした静けさ、草や木の匂い  
、温かい~~ハ~~春~~ノ~~陽光~~ノ~~——私はこのまゝ眠つてし  
まいた。明~~ハ~~い~~ハ~~いや~~ハ~~な、遠くまで来た~~ハ~~と云  
ふ和~~ハ~~が~~ハ~~疲~~ハ~~れ~~ハ~~に、私は~~ハ~~し~~ハ~~は~~ハ~~自分~~ハ~~を~~ハ~~任~~ハ~~せ~~ハ~~ない  
氣になつた。私は二里近くも歩~~ハ~~り~~ハ~~いて来た氣  
がした。そして一向半ばかりの流~~ハ~~れの~~ハ~~橋~~ハ~~を~~ハ~~渡  
つて、傍の木挽小屋~~ハ~~が、流水に流~~ハ~~れて~~ハ~~細~~ハ~~い~~ハ~~路  
を~~ハ~~た~~ハ~~り~~ハ~~も~~ハ~~上~~ハ~~つた。その~~ハ~~向~~ハ~~に~~ハ~~二~~ハ~~三~~ハ~~軒~~ハ~~の~~ハ~~見~~ハ~~す~~ハ~~ほ  
ろしい百姓家が見~~ハ~~え~~ハ~~た。谷の一~~ハ~~番~~ハ~~奥~~ハ~~の家

私は折う回いて来たのであった。

緩い傾斜地の田や畑に囲まれて、まだらん

なには古くは見えない草葎及び根の一棟か、私の

歩道にて来た左<sup>(路の)</sup>の方に見えた。かまりの高

さの山が長い廣い裾をひろげてゐた。そのほ

とんど中腹のあたりまで畑になつてゐた。そ

の畑を水田に直すべく、十四五人の土方たち

が縄を張つて畦を作り、シヤベルや鍬などで

忙しそうに働いてゐた。家の近く、郷で巻

ケートルをきつて素足に~~草鞋~~草鞋を履いて

た四十五斤の余配の男が一人で鎌を動かして

稲を刈つてゐた。私の門口へ立つと、この男

が鎌を手にしたまゝで、こちへやつて来た。

家の前の細い溝で七つ位ゐる女の子と五つ位

ゐる男の子とか水乗りをして遊んでゐた。

林の軒下に鶏が六七羽固けられて、と鳴いて

ゐた。既では若い牝馬が尻尾を振つて蝶を追

つてゐるのか、外から見えな

う。佐々木さんはこちから私を男

が丘のいて来た時に、帽子を取つて訊いた。

さうです。年前か佐々木ですが、……

さうですか。私は津軽から来ました。東京

へ出てゐる弟です。……と、私は感情を動

かしなから、更めてお辞儀をした。

あさうでしたか、津軽の兄さんでしたか、

これはまあよく……は、美見の顔色を動かし

なから云った。

廣い板の間の基所では、葉で編んだ籠に入

り入れて、満一筆とは短たぬじしい赤んぼが

頬中蠅にたかふ火をか、スー／＼眠つてゐ

た。叔が大豆か、俵が二十俵位の積まねてあ

つたり、康茄子が何となく益へられ、こゝ

つた。

生憎今日はまた、あれも子供二人つれと真

辨、お晝を持つて豆抜きに行つて、こゝん

で、あなたか逢つて来た路傍なんなが、用水

源の橋のすぐ手前のとこ、……

つかないか、たびせし、……

さあ、そんなやうな気がし、……

たい、金中で會つた位、……

山田山田

ないでせよ。何しろ十七・八年も會つてな  
いんですか。いーいー

可 そんなにありません。私もほかの皆さ  
には會つてゐるんですか。お總領のあなたに

かけ會つてゐるの。いつも乞食にしてゐたので  
したか。何しろ先賤<sup>私たちが</sup>か 撲いておましをし

いやくまあおいで下さいました。お見<sup>い</sup>心か  
少悦<sup>い</sup>かしげに云つて呉れた。

可 それでは一走り行つて来ますか。いーいー  
大きな手取りにお湯を沸かして、茶や座蒲

団をすゝめて置いて、殿<sup>い</sup>馬を引出し<sup>大</sup>  
裸か馬に繩の手綱の鞭を号れど駈けて行つた

。私は小さな姪と甥相手に、爐に柴を炊やし

か、乾いた見ると、もう家の中は、焚火も暑  
ましか、蒸かしなかつた。子供たちは、土間の

隙<sup>い</sup>、馬糞を四つ五つ持ち出して来た。熱

い灰の中へ差込んだ。私は今に、姉やほかの

甥たち<sup>い</sup>に會つた。今日<sup>い</sup>おすぐにも引返し

二十 神楽山田

257

こまいしと云つた満足した気持ち、子供たち  
 に話し合ひたり、門口に出た土方たちの忙し  
 く働いてるのを見て、今明葉中にはまた五  
 町歩位の畑を水田に直す計画がとまらぬ義兄の  
 懐に土、私は満足を感じた。

1965  
 十年六月一